山ちゃん先生の ウチナーサンこーン教室

5

小学校に入学した太郎さんは、算数の勉強が楽しみでした。「数字」もしっかり読むことができました。さあ、お待ちかねの算数の問題です。「1、2、3、4、5、6、7、8、9」楽々、次は「10」調子いい、次は「101、102、103…」あれれれ、先生から大きな×（バツ）をもらって、太郎さんがっかり。なぜ、太郎さんは「11を101、12を102」と書いたのでしょう？

数字の読み 日本語便利

12を102と書いた子ども

実は、太郎さんは「12」を読んだように書いたのです。「12」は「じゅうに」と読むから、「10と2」で「102」となるのです。これまでの「十進法」を使った「エジプト数字」や「漢数字」を思い出してください。「∩|||」で「10と2」、「十二」で「10と2」になるでしょう。

それに、日本語は発音と表記が一緒になるように、とても便利にできているのです。例えば、「い」と「ぬ」と書いて、続けて発音すると「いぬ」と聞こえて、「わんちゃん」の意味になります。英語はどうでしょう。「ｄｏｇ」(ディー・オー・ジー)と書いたように発音して、意味が分かりますか？ 「ディー・オー・ジー」と書いて、「ドッグ」と読まないと意味が通じないのです。日本語って、数字の読み方もとても便利にできているのです。

日本の子どもは、4、5さいぐらいで「10」まで唱えられる子はめずらしくありません。小学校入学前に「100」や「1000」まで数えることくらい当たり前になっています。勘違いしたら困るのは、それは日本の子どもが数の認識が高いのではなく、日本語が便利にできているということです。

1年生が10や20まで簡単に数えられて書けるといって、数を分かっているわけではありません。「9」と「10」の間には、とても大きな力べがあるのです。「9」まではいいとしても、「10」という数字は全然ちがうのです。

「10」を理解するためには、お部屋の発想「位取り」と、偉大な「0」の認識が必要なのです。人類が何万年もかかってつくり上げた「インド・エジプト数字」の世界、「位取り」と「0」の獲得がない限りは、本当に「10」の数字は分からないのです。1年生での「10」の指導が、長い「算数・数字」人生の最大の急所であり、すべての基礎といっても差しつかえないのです。すると、「12」を「102」と書いた太郎さんは、数字を合理的に考えている非常にかしこい子どもであることに間違いないのです。

（山本隆司・高原小教諭）